

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 三浦哲郎 『忍ぶ川』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9YKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 77 回のツイキャス読書会の課題図書は、三浦哲郎さん 『忍ぶ川』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

三浦哲郎「忍ぶ川」感想文

本文を読まず、解説だけを読んで、
クリステヴァやイーグルトン
を使って、適当に茶々を入れるのは、
得意中の得意なのですが。
私が所持している、
昭和四十年五月三十日初版発行の
新潮文庫版『忍ぶ川』を
パラパラめくっていると、
表題作「忍ぶ川」以外にも、
主人公の一人である「志乃」は
登場していて、中尾彬さんでは
ありませんが、「志乃」が出ている
作品だけは、全部読んでみたいと
いう気にさせる、表題作では
ありません。

私は村上春樹の全小説作品を
読んでいる者ですが、なぜ
春樹さんがこの『忍ぶ川』
について、いい文章だ、と
言ったのか、まだわからずに
います。

(おわり)

初参加 メルマガ読者 サイトウさん

謙虚、純粋な志乃に恥ずかしさを
抱きました。

後半。

(え、とつても。これからは、東京に
住む事があっても、いつもこうして
寝ましようねえ。)

この一文で、貯水場生まれ。川となり流れを掴んだしの。ジーンとしました

(おわり)

「未来へ」

最初、読み始めると少し暗い感じがして先を読むのが少し不安になるような感じがしました。

志乃と私、それぞれに少し暗い影のようなものをもっているが、お互いを大切に思っているところが好感を持ってました。

志乃の実家の事など、志乃にとってはできれば知られたくないような出来ごとを知っていても私という人はそれでも志乃や、志乃の家族を大切に思っているところは本当の愛を感じました。

お堂に住んでいるってなかなかの衝撃かもしれないけれど、そんな事に気をとられないで、残されたわずかな命の父親を安心させてあげる事ができたのは良かったなと思いました。

志乃の妹が、なかなか家に案内させないように遠回りさせていた所はいじらしくて少し切ない感じがしました。

私は、忍ぶ川の所しか読んでいませんが、過去には色々あっても、最後に未来への幸せの兆しが見えたのでほっとしました。

(おわり)

そこに愛はあるのかい？

私の住む気域では初夏と呼ぶ季節になり、木々は力強く緑の葉を生い茂らせ、其処此処の通りの家には色とりどりの花が咲き誇り飾られている。

それだけではなく、どこから種が飛んできたのか、タンポポやひなげし、ノゲシやハルジオンなどがアスファルトの隙間から花を咲かせている。

この作品を読み終えて、父親が他界してしまった事で離散となってしまった志乃の弟や妹たちがどうなったか？と気になった。

漫才コンビ麒麟の田村さんは父親の「解散！」の一声でホームレス中学生になったそうだが。

トルストイの「人はなんで生きるか？」の中で「親は無くとも子は育つと言うけど、神なしでは人は生きられない」と言うフレーズがあったように、遠縁の親戚に預けられた幼い妹のいる場所にも愛があるように願う。

親や兄弟と離れて寂しくとも、自分を卑しく思ったり誰かを恨んだりして生きる事はありませんようにと願う。

ちいさく、貧しくとも、つよく、心ゆたかに生きよう。アスファルトの隅に咲く花のように。

(おわり)

純文学的な、余りに純文学的な。

ふたりが相思相愛に結ばれてよかった。

ほっとしたので、続けて「初夜」「帰郷」「団欒」までを読んだ。

作家の私小説だと解説にあったが、妻との馴れそめ、自分の家族との関係を題材に、みずみずしい純愛や、無事結ばれて家族としての信頼を深めてゆく日々様子を、変わりゆく季節の描写とともに清潔な写生文で淡々と。すらすら読めた。

ただ、読み進めていくごとに明かされる家族の事情は明るいものではない。

「忍ぶ川」の続編にかかってしまうが、兄二人と姉二人を、理由のはっきりせぬ失踪や自死で続けて失くしている。老いた父を病気で亡くしたあとは、母と姉の面倒をみるという重責に、定職を持たない主人公は苦悩する。だけれど、弱音を吐かず、信念は強い。いくら生活に困っていても最後の一冊の本を売っても自分の書くべき本を世に残すべく書きつづけている。

冒頭から登場する志乃は明るく可憐だ。手振り身振りまで可愛い。料理屋で働きながらも卑屈になることなくちゃきちゃき動く、芯の通った日本女性らしい潔白な人。ときどき見せる三步後ろからついてゆくような姿が古風に見えるが、のちのち書かれている人物像から想像すると上手に男性を支えて家族をしっかり守る母の理想像。

ありのままかどうかは別にして、その二人の小さな結婚式が雪深い田舎で行われている家族の安堵さが、温かく懐ましくこころに沁みいつてきた。

芥川龍之介は、「話」の筋のない小説のありようを論じていたときに志賀直哉を評してこう残している。「志賀直哉氏はこの人生を清潔に生きている作家である。それは同氏の作品の中にある道徳的口気にも窺われるであろう」

「忍ぶ川」が芥川賞受賞作だと知ったのは読み終えてからだだった。晩年まで賞の選考委員もつとめた三浦哲郎先生の文章がどこまでも清潔に感じるのは、その人生も道徳的に清潔をもつとうとしていた。かどうかはわからないが、少なくとも、わたしはこういう清潔で淡々と美しい写生文の小説が好きだ。

(おわり)

『 志乃をつれて 』

志乃をつれて、木場に行った際、主人公の「私」の心と身体はその土地にリンクしなかった。「私」にとって、木場は失踪した兄と木の粉による負の場所であり、「私」の一部だ。うまく負にチューニングできなかったのは、志乃の存在により「心がみちたりている」からだとして自己分析する。死んだ(と信じている)兄にそっと手を合わせる志乃を見て「私」は腑に落ちていく。「私」の中で何かが動きだしているのが、読者の私にも手に取るように伝わる。

家族ではない誰かと共に生きていこうとすることは、それまで別々だった人生を擦り合わせていく作業が不可欠だ。木場や洲崎という場所ばかり、お互いの家庭環境や志乃の父親の死しかりだ。その作業の過程ではプラスの部分だけではないものも露呈してしまう。

ただ、この小説では、本来なら過酷なその作業がとても穏やかに描かれていて、この二人を微笑ましく見つめていられる。汽車の中から見える「私」の実家を「あたしのうち」だとはしゃぐ志乃に、最後にお互いに完全にチューニングが合ったのが手に取れて、読者の私まで二人のこれからの幸せを願わずにはいられない。だから、その後を描く続編もドキドキしながら読んでしまう。

ただ、潮田や婚約者の登場で燃え上がる恋は一時的なことだが、人生を共にするという事は綺麗事だけでは済まされない。がゆえに喜びも大きくなる。だから、「私」は木場にはもうリンクしなかった。だからこそ、この小説の最初の一行目の「志乃をつれて、深川へいった。」に心を掴まれる。「志乃をつれて」は決して物理的なことだけではないと思うのだ。彼女の背負っている業や生い立ち、人生ごと「つれて」いくことだ。お互い、自立して別々に営んでいた人生を擦り合わせ重ねていく責任だ。最後の汽車の中で、「私」が赤面できるシーンも今のうちだけかもしれない。

ただ、人生ごと「つれていく」という重みに憧れないこともないけど。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「暗い血 汚れた血 そして親孝行」

主人公の私は、自分の六歳の誕生日を境に一族が衰運を迎えたことを気に病んでいた。兄姉が相次いで自殺したり、失踪したりした。家と血のつながりが、手枷足枷となって運命を縛っていた頃の話である。

『忍ぶ川』を読んで、嫌だなあと思った。このジメジメした日本文学の私小説特有の情念が、隅々までわかってしまうので、余計に嫌だ。

逐電した兄も、おそらくえいがかっこしいだったのだ。一族から借金して身をくらませた。つじつまがあわなくなると、どこかに消える。そうだ。そうなんだ。下手くそ。身勝手に死んだり失踪したりする肉親がいて、この男は、その暗い血におびえて生きる無力感に耐えられず、志乃という女性を道連れにした。

無力感とナルシズムで志乃を口説いたとしか思えないのだが、でも、輪郭のくっきり、詩情あふれる文章で綴られていて、すいすい読んでしまった。

「人はなんで生きるか？」「自由とはなにか？」そういう主題の話ではない。つじつまが合わなくなれば、自殺したり失踪したり、こんな選択肢しかないという戦後間もない日本の社会の現実が、丹念に描かれているだけだ。

貧困、絶望、不条理との戦いが描かれているわけではない。両親の死ぬ前に結婚して安心させてやりたい、でも、経済原理は無視、という親孝行が描かれている。ただ、とても幼い男女の純粋としては美しい。

太宰や安吾が、家庭を呪詛して、親を呪って、小説を書いたのを思えば、なんてナイーブであろう。ナイーブな保守反動文学だ。

日本文学の保守本流は、仏壇や葬式など、死者たちばかり書いている。志賀直哉の『和解』は、死んだ子供をどこに埋葬するのかという問題を描いた。川端康成の『雪国』は、死んだ恋人の墓を守りながら狂っていく美しい女を描いた。そんな話ばかり。

「死者は死者に葬らしめよ」という福音書の言葉があるが、そこからはじめてほしい。でないと、自殺者の自己欺瞞にとらわれ、無力感のなかで、はかなく衰弱していく姿こそ、日本文学だとなってしまう。嫌だなあ。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343